

# 長崎出島における復元整備の経緯と問題点

大平 晃 久

- I. はじめに
- II. 復元整備の経緯
  - (1) 戦前までの状況
  - (2) オランダの復元要求と復元整備の開始
  - (3) 全面公有地化・復元への転換
- III. 居留地期・明治期を中心とした近代の否定
- IV. 県庁移転の影響
- V. おわりに

## I. はじめに

長崎市の出島（国指定史跡「出島和蘭商館跡」）は、有料施設化されたのが2006年4月のことで、本格的な観光スポットになってまだ間もない（図1）。復元整備が本格化するほんの10数年前まで、人気のある観光対象とはいえなかったが、現在では年間40万人以上が入場する長崎における一大観光スポットとして定着している。

歴史遺産の整備をめぐる問題として、ある特定の時代への復元によって他の時代の要素が排除されることがあげられる<sup>1)</sup>。つまり、過去の意図的、恣意的な利用が問題とされてきた。歴史遺産の整備は、ある場所やその記憶をどうとらえるかという表象の対立、すなわち、場所と記憶をめぐる「政治」としてとらえられる。そして観光はそこに大きく関わる。長崎市の出島復元整備はその好例であり、現在進行中である点からも興味深い事例



図1 出島とその周辺

長崎市行政区図に加筆。開港六町の外郭線（太線）は「長崎惣町絵図」（明和年間、1764～72年）の町境と、現存する石垣のラインによる（一部推定）。なお「長崎惣町絵図」は次に収載。布袋厚『復元！江戸時代の長崎』長崎文献社、2009。

であると考えられる。

本稿では、戦後の出島復元整備の経緯がどのようなものであったか、さまざまな文献資料における表象に留意しつつ、明らかにして

いく。出島復元整備に関する既往研究としては、実際に整備に携わる側から総合的に紹介した山口<sup>2)</sup>、出島をめぐる表象に着目する新木<sup>3)</sup>、「伝統の創出」として出島復元を紹介する奈尾<sup>4)</sup>などがあげられる<sup>5)</sup>。特に新木、奈尾は筆者と関心が近い研究であるが、本稿ではより広範に、また現在進行中の事象まで含めて出島復元整備の経緯を明らかにする。そして、それによって、他の事例に共通する、歴史遺産整備の問題点の考察につなげたい。

## II. 復元整備の経緯

### (1) 戦前までの状況

出島は1634年からポルトガル人を收容するために建設され、次いで1641年以降は平戸から移されたオランダ商館が置かれた。当時の面積はおよそ15,000m<sup>2</sup>である。開国後の出島は、東山手、現在グラバー園のある南山手、現在の新地中華街である新地蔵などとともに、1899年まで外国人居留地になる。一方、図2に示したように、1885～89年の中島川改修で北側4分の1（平均でおよそ18mほど）が削られるとともに東側が埋め立てられ、さらに、1897年以降は南側と西側が次々埋め立てられて原型を失った。

出島は、1922年10月12日に「出島和蘭商館

跡」として高島秋帆旧宅、シーボルト宅跡、平戸和蘭商館跡とともに長崎県内で最初に国の史蹟指定を受けている。ただし、出島は長崎県による史蹟候補には当初は含まれていなかった<sup>6)</sup>。戦前には特段の保全や復元の手は加えられていないが、1937年に出島の範囲を表示するための鎮が周囲の道路に打ち込まれているのが特筆される<sup>7)</sup>。

観光案内書において出島は管見の限り1903年以降紹介されているが<sup>8)</sup>、『鉄道旅行案内』の各年版にはほぼ登場しないように<sup>9)</sup>、観光対象としての位置付けは低い。一方で、行政や識者によって観光資源として出島を整備すべきことが主張されている。例えば、1934年に長崎市の市政振興調査委員会は「観光遊覧都市として発展せしむべき方策」の一つとして「出島附近の建物及び旧蹟の美化」をあげている<sup>10)</sup>。ただそれらが実行されたことは確認できない。

### (2) オランダの復元要求と復元整備の開始

出島の整備は、1948年、戦勝国オランダの駐日大使から吉田茂首相に対し、戦時賠償の代わりに出島復元を実施せよとの強い要求があったことをきっかけとする<sup>11)</sup>。国の文化財保護委員会から指示を受けた長崎市では1951年から整備計画の立案に取り掛かり、1953年

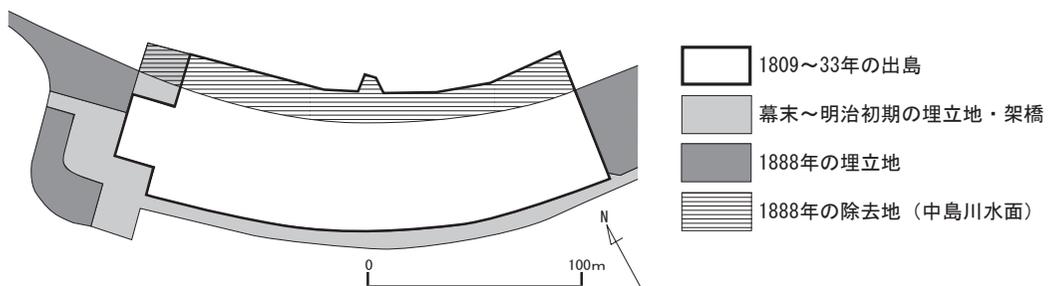


図2 出島外郭の変遷

山口美由紀『長崎出島一甞るオランダ洋館』同成社、2008、22頁掲載図を修正・簡略化。1889年以降の埋立・除去は表示していない。

1月に1952年度から8年計画の整備案を策定している<sup>12)</sup>。この計画は、図3に示した1区画、およそ990m<sup>2</sup>を買収、旧石倉1棟と「オランダ溝」と称される三角溝を復元し、植物園を整備するというごく小規模なものであり、1957年11月に完成した<sup>13)</sup>。なお、新聞紙上では「オランダ屋敷の復元」と喧伝されているものの<sup>14)</sup>、この旧石倉、「オランダ溝」は居留地期の遺構であり、「オランダ屋敷」に関わるものではない<sup>15)</sup>。そのような石倉の復元整備には批判があり、議論となっている<sup>16)</sup>。またこの時期には出島の範囲を示す鋺が再度設置されている<sup>17)</sup>。この鋺が示す範囲は、オランダ商館期ではなく、居留地時代の外郭に近いものであった<sup>18)</sup>。

その後、1966年7月に新しい出島の整備計画が立案されている<sup>19)</sup>。これは出島北東部

(現在の「ミニ出島」付近)のホテル建設問題を端緒としたもので、ホテル予定地を買収(1953年以来2件目の買収地)、従来の整備地区を含む出島の東半分(図3)を1967年度から5年計画で買収・整備することが盛り込まれた。この計画でも、立案されたのは居留地期・明治期建築物(旧出島神学校、旧内外クラブ、新石倉)の保存整備と、史跡公園的な整備のみである。なお、上記の計画に盛り込まれた居留地期・明治期建築物の保存整備は予定通り進んでいない。1970年にはそれら保存整備とともに、1985年度までの表門橋の建設なども目指した新たな整備計画(1973年度～)が示され<sup>20)</sup>、一部が実行に移された。出島の整備が進むなかで、オランダとポルトガルの両政府が出島内での自国に関わる展示施設の充実を求めることも起きている<sup>21)</sup>。

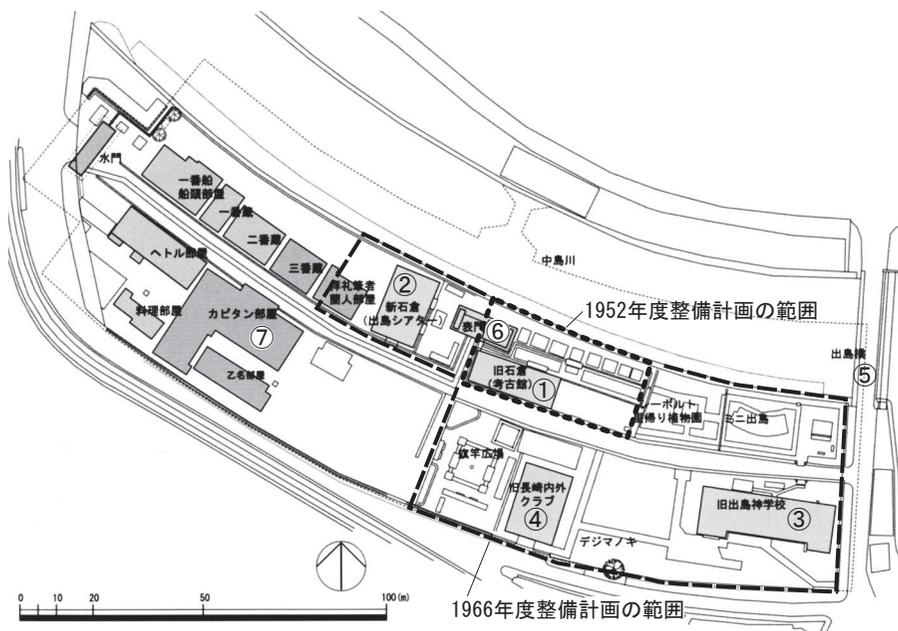


図3 出島の施設配置と整備計画の変遷

文化財保存計画協会編『国指定史跡「出島和蘭商館跡」第Ⅱ期建造物復元工事報告書』長崎市教育委員会、2009、18頁掲載図に加筆。

①旧石倉 ②新石倉 ③旧出島神学校 ④旧内外クラブ ⑤出島橋 ⑥表門 ⑦カピタン部屋

このように、戦後の出島の整備事業はオランダの要求に応えるために始められ、国指定史跡として文化財保護の枠組みの中で進められてきた。1970年代までのその内容をみるならば、居留地期・明治期を重視しその時代の景観を保全する整備であったといえる。「オランダ屋敷の復元」と唱えられつつも、実際にはオランダ商館期ではなく、現状の居留地期・明治期の景観の保全が図られてきた<sup>22)</sup>。

また、そうした整備事業に、当初から観光が重要な目的として存在したことはいうまでもない。早くも1949年7月に市議会に提出された「国際文化都市建設計画素案」には「出島蘭館の整備」が盛り込まれている<sup>23)</sup>。新聞報道でも、「観光長崎のシンボル出島オランダ屋敷」<sup>24)</sup>、「長崎に又一名所」<sup>25)</sup>など、出島の復元が観光に資することは当然視されている。

表1 出島復元整備をめぐる動き

年度	主な内容
1922 (大正11)	国指定史蹟（「出島和蘭商館跡」として）
1948 (昭和23)	オランダ大使から吉田首相に対して出島復元を強く要求
1951 (昭和26)	文化財保護委員会から長崎市教委社会教育課長に出島復元指示 土地公有化・旧石倉復元など検討開始
1952 (昭和27)	整備計画策定、土地公有化・旧石倉復元など整備開始
1966 (昭和41)	出島北東部にホテル建設計画 整備計画策定、庭園・石塀・門整備
1976 (昭和51)	新石倉復元、ミニ出島設置
1977 (昭和52)	議員・市民グループによる復元計画
1978 (昭和53)	長崎市出島史跡整備審議会発足
1980 (昭和55)	旧出島神学校解体修理
1982 (昭和57)	史跡整備審議会による復元整備構想の答申
1986 (昭和61)	出島範囲確認調査
1989 (平成1)	表門再現（本来の位置と相違） 【長崎旅博覧会（1990）】
1991 (平成3)	長崎商工会議所による出島の早期顕在化要望
1994 (平成6)	第2次出島史跡整備審議会発足 「出島・長崎奉行所を復元する会」（大学教員・経営者中心）発足
1995 (平成7)	史跡「出島和蘭商館跡」復元整備計画策定 旧内外クラブ保存修理
1996 (平成8)	遺構発掘調査開始
1997 (平成9)	旗竿再現（本来の位置と相違）
1999 (平成11)	南側（東部）・西側石垣復元
2000 (平成12)	第I期5棟復元 【日蘭交流400周年記念式典】
2001 (平成13)	土地公有化完了
2005 (平成17)	南側（中央部～西部）石垣・練塀復元、第II期5棟復元
2006 (平成18)	出島入場有料化
2016 (平成28)	表門橋架橋（予定）
2017 (平成29)	県庁移転・跡地整備開始（予定）

行政の施策が中心であるため、年度（4月～3月）で表記した。

### (3) 全面公有地化・復元への転換

ここまでみたように、1970年代まで出島の整備は居留地期・明治期景観の保全が中心であった。ただし、そのなかでは明確な整備計画にはつながらないものの全面復元を目指す主張もあり<sup>26)</sup>、市議会議員・市民グループから批判・提案が出されている<sup>27)</sup>。

居留地期・明治期の保全から大きく転換するのが、長崎市出島史跡整備審議会設置(1978年)と、そのもとでの復元整備構想の答申(1982年)である。この答申では、「出島の最も整備された時期」である「19世紀初頭を中心とする前後の20年間」の「施設、景観をでき得る限り忠実に復元整備すること」が目標として示された<sup>28)</sup>。

1982年というこの時点で居留地期・明治期の保全からオランダ商館期の復元へと大きく転換したのは、2つの理由が考えられる。1つは、この時期に史跡整備が従来の現状維持中心から、幅広い復元の許容へと転換しつつあったことである<sup>29)</sup>。文化庁の指導のもとで審議会が組織された出島は、建造物の復元によって来訪者にとって分かりやすい、観光利用へより開かれた史跡整備へと変化するはしりであったといえる。もう1つは、1981年末時点で史跡指定地区の67% (道路敷を含む) が公有化されており<sup>30)</sup>、史跡整備の基本として全面公有化が進められるなかで、公有化した(保全すべき建造物のない)土地の活用必要性が生じつつあったことである<sup>31)</sup>。

全面公有化・オランダ商館期の復元への転換に伴って、未買収地の企業・居住者は振り回されることになった。東京海上長崎支店は1971年に史跡整備への「思い切った協力」として「オランダ商館風」(実態は居留地風)の事務所を新築したところであったが<sup>32)</sup>、1984年に敷地は買収、建物は撤去されている。また1982年以前であるが、長崎新聞本社は1961年に「出島にふさわしい外装」で新築され、1969年に増築工事が完了したものの、1980年

に移転している<sup>33)</sup>。

復元整備構想の答申後、公有化は進展したものの、復元は進んでいない。ただし、唯一、表門が長崎旅博覧会(1990年)を機に本来とは異なる位置に復元されている。その長崎旅博覧会のメイン会場は出島を模して海面に仮設されたほか、出島や長崎奉行所を含む「江戸村」というテーマパークが1986年に長崎市内の神ノ島埋立地に構想されている<sup>34)</sup>。長崎における、出島のかたち、復元への強いこだわりがそこにはみとれるのではないだろうか。

停滞していた復元整備事業は、1995年の復元整備計画策定によって大きく進展をみせている<sup>35)</sup>。そこには出島復元を政治的実績として位置づけようとする当時の伊藤一長市長の積極姿勢も大きかったとされる<sup>36)</sup>。この計画は復元時期をシーボルトの活躍した1809~33年に設定しており、短中期と長期の2つの計画からなっている。短中期復元整備計画(当初は2010年完成予定、2013年現在も進行中)は、発掘調査とそれらに基づく建造物25棟の復元を盛り込んでおり、2005年度までに10棟の復元が完了している。この結果、2006年4月1日からは出島の入場は有料化され、テーマパーク的な閉ざされた空間と化するにいたった。またこの短中期計画では北側を除く周囲の石垣の補修・復元と顕在化が示され、後述する出島橋の架け替えや路面電車の付け替えまでもが含まれている。一方の長期復元整備計画は、中島川を北にずらし、周囲をすべて堀割化して出島の外形を完全に復元するもので、周辺道路の大幅な付け替えを含むさらに壮大な構想である。2013年現在、表門橋の架橋が進められているとともに、現状とかげ離れた復元整備計画の見直しも進められている。

### Ⅲ. 居留地期・明治期を中心とした近代の否定

前章でみたように、1982年の復元整備構想

答申、1995年の復元整備計画策定によって、出島は1809～33年の景観に復元されつつある。特定の区切られた時代への復元がどのような問題を含んでいるか、この章では概観したい<sup>37)</sup>。

まず、1970年代までの整備の中心であった居留地期・明治期の建築物、具体的には旧出島神学校(1887年)と旧内外クラブ(1903年)である。1995年度の復元整備計画では、従来からは一転して、これらは撤去すべきとの極論さえ出たものの<sup>38)</sup>、現地に残されることになった。しかし、旧内外クラブは南側の正面入り口が石垣の顕在化によってふさがれてしまっており、好ましい状態ではない<sup>39)</sup>。

次に、図2で示したように、出島の南側には、居留地時代に海岸を埋め立てて遊歩道が設けられていた。前章でもみたように、出島の範囲を示す鉾はこの居留地期の外郭を示すように設置されていたものである。この遊歩道の石畳は近年まで残っており、住民からはそれに価値を見出す発言もあったが<sup>40)</sup>、石垣の顕在化によって現在ではすべて失われている。

そして、復元整備計画では出島の外郭の顕在化のために撤去・移設されることになっている出島橋がある(図3)。しかしこの出島橋は、1890年に北西に架設、1910年に現在地に移設された、日本で現在供用されている橋の中で最古の鉄製道路橋であり<sup>41)</sup>、土木学会選奨土木遺産でもある。さらには、元來の出島を削り取った現在の中島川護岸さえも、明治初期(1885～89年)のデ・レーケの参画した治水事業を今に伝える近代化遺産としての位置づけがなされている<sup>42)</sup>。

そのほか、出島東側には現在「九州で最初に電話交換を開始した長崎電話交換局跡」の石碑が建つが<sup>43)</sup>、この跡地は出島復元整備計画では外郭顕在化のために削られることになっている。また、復元整備計画に伴って取り壊された建築物のうち、海江田病院(1998

年撤去)は「出島らしい建物」との評<sup>44)</sup>もあった1931年建築の洋館で、被爆建造物でもあり、取り壊しには批判があった<sup>45)</sup>。

このように、1980年代以降の復元整備においては、居留地期・明治期を中心とした近代の要素の軽視・排除が著しいことがわかる。

現在の地上にみられる歴史的景観を否定する整備計画は適切とはいえない。地表にオランダ商館期の遺構が一切残らず、完全に市街地化していたことを考えれば、全面公有化・全面復元ではない道もありえたのではないか。すなわち、部分公有化のうへ、ガイドンス施設としての役割を果たす一部の建物や周囲の石垣のみを部分復元し、残りは居留地期・明治期の景観をモデルとした町並みへと誘導することも考えられたらう。

居留地廃止後の出島は、上海航路の岸壁を控え海外渡航者検査所や運送業者が立地し、路面電車の通る下町であった<sup>46)</sup>。上述したように、長崎民友新聞(のち合併して長崎日日新聞、長崎新聞)の本社も長く置かれていた。また、ただ繁栄したばかりではなく、ある歌人・郷土史家の表現を借りれば、出島には居留地期・明治期の「異人達と長崎人のかもし出した何かしら濛気の如きものが漂う」ており、「それらをやっぱり失いとうないと思うなあ…」と言わしめる場所である<sup>47)</sup>。なかでも大正期のフランス人ピナテールにまつわる記憶は多く記述されるところで、「私は島を記述する上においてピナテール老人を脱漏(オミット)することは出来ぬ<sup>48)</sup>」という述懐もある。このように出島は、極めて濃密な近代の記憶を有する町であったといえようが、それらの面影はまったく取り除かれ、無かったものにされてしまっている。

現在の出島は、おおむね、西半分がオランダ商館期の復元エリア、東半分が居留地期・明治期の保存エリアに分かれている。それなりに分かりやすく、近代における出島の変容や意義も、説明さえ工夫すれば理解しうるエ

リア分けになっているといえる。しかし、今後、東側の旧出島新学校と旧内外クラブの間にもオランダ商館時代の建物が復元されると、観覧者にとって特に出島の近代がわかりにくくなってしまふことが危惧される。

なお、近代同様に出島の復元整備事業において等閑視されているのがポルトガル商館期である。「出島和蘭商館跡」という史跡名称からしてポルトガルは無視されているし、出島内でポルトガルに関わるものとしては、ごく一般的な展示解説のほかには記念碑が1基あるに過ぎない<sup>49)</sup>。元來の出島はポルトガル人、あるいはカトリックを隔離する「負の遺産」とみることができる。ポルトガル商館期がほとんど語られないのは、日本や長崎というスケールであればともかく、出島というスケールではポルトガルに関して正の記憶は示しづらいということなのかもしれない。

#### IV. 県庁移転の影響

出島の北、段丘の先端にある長崎県庁舎は、長崎駅南の魚市跡へ移転することが決定しており、2013年現在、その跡地利用について検討が行われている(図1)。ここでは県庁舎跡地をめぐる出島の復元整備と関連付けた議論がなされていることをみていく。

まず、県庁舎の移転に最終的なお墨付きを与える県庁舎整備懇話会(2008~09年)における議論を検討する。この懇話会は具体的な何かを決定するというよりは「県民に魚市移転を周知する舞台装置」<sup>50)</sup>であった。37人の委員が選任され、8回(うち1回は見学会)の会合がもたれている<sup>51)</sup>。

この懇話会は移転を決定するためのもので、跡地利用について話し合うものではないが、跡地利用もたびたび議論の俎上に載っている。すなわち、第3回の会合(2008年9月1日)では県庁舎の位置に近世には長崎貿易を監督する長崎奉行所西役所があったという歴史や、出島の復元整備の状況や今後の予定

が説明され、市長公室長が「出島周辺の貴重な歴史まちづくりに配慮する必要があるのではないかと発言している<sup>52)</sup>。また、第4回の会合(2008年9月27日)では、同じく市長公室長が「出島と西役所の敷地、さらに中心市街地に点在する各種史跡などを面的に連携させる整備によって、長崎の魅力を高めて交流人口を増加させる契機とすることも考える必要があるかと考えております」と述べている<sup>53)</sup>。このように、県側は県庁舎跡地利用は未定としながらも、観光関連施設として長崎奉行所西役所の復元を検討していることを強く示唆しているといえる<sup>54)</sup>。なお、県だけでなく民間団体からも奉行所西役所の復元が提案されている<sup>55)</sup>。

なお、県庁舎整備懇話会の第5回の会合(2008年10月18日)では、出島の復元整備に関わる建築史研究者とみられる委員が、県庁が移転しないと中島川を北にずらしにくいため、出島復元ができないという趣旨の発言をしている<sup>56)</sup>。これは直接、県庁の跡地利用と結びつくものではないが、出島の復元整備が県庁舎の移転・跡地利用に絡めて取り上げられていることが分かるだろう。

それでは、県庁舎跡地に長崎奉行所西役所が復元整備されることはどういう意味を持つのだろうか。現県庁舎の位置には、1633年以降は長く奉行所西役所が置かれたが、それ以前にはイエズス会本部・カトリック教会、さらにその前には森崎権現があった<sup>57)</sup>。そうした場所が幕末の海軍伝習所を経て長崎県庁に引き継がれたわけであり、ここは長崎における聖俗の権力の中心であり続けたといっていよう。そうした多様な来歴を有する場所が、出島とセットになって、単一の時代、すなわちここではオランダ商館期に復元されようとしているといえる。いいかえれば、出島に新たに創り出されたオランダ商館期の景観の、出島から北の段丘面への空間的な拡大が、現在進行しつつあるといえる。

県庁を含む段丘面の先端は、1571年に大村氏によって町建てされた長崎の起源といえる地区（六町）であり、イエズス会領期（1580～87年）には（今日みられる石垣が当時のものというわけではないが）城塞都市と呼びうる存在であった<sup>58</sup>。しかし、こうした歴史は現地ではほとんど顕彰されておらず、県庁前に解説プレートがあるのみである。

川口・村尾<sup>59</sup>も述べるように、それは長崎において出島以前の歴史が軽視されていることの現われといってよいだろう。県庁舎跡地に長崎奉行所西役所が復元整備されることは、こうした出島以前の忘却をさらに強めるものと考えられる。

## V. おわりに

本稿では、過去の意図的、恣意的な利用として長崎市出島の復元整備を取り上げ、その経緯を、新聞など文献資料における表象に留意しつつ、明らかにしてきた。その内容は以下の3点にまとめられる。

まず1点目として、1970年代までの居留地期・明治期景観の保全から、1980年代以降はオランダ商館期の景観への復元へと、長崎市の出島整備が大きく変容したことを示した。2点目に、1980年代以降の復元整備においては居留地期・明治期を中心とした近代の要素の軽視・排除が著しいことを明らかにした。さらに3点目として、出島のオランダ商館復元とセットになった、県庁舎跡地への長崎奉行所西役所の復元整備が、開港六町をさらに目立たないものにし、出島以前の忘却をさらに進めると考えられることをみた。

現在、出島で行われている建築物の復元それ自体は、極めて学術的な、「真正な」ものである。しかしながら、全体として復元整備計画をみるならば、特定の記憶を選び出し、記憶の重層を否定して場所の意味を単純化するものといわざるをえない。観光を含めた都市間競争のなかで、こうした場所の創出は把

握される必要がある。そのなかでも、既成市街地内に有料区域として周りから閉ざされた歴史的街区が全く新しく創出されたという点で、出島は特筆される存在といえよう。

（長崎大学）

## 〔注〕

- 1) 上杉は吉野ヶ里遺跡について、萩野は明日香村について、この問題を指摘している。また萩の重要伝統的建造物群保存地区見直し調査は、近世だけでなく明治期の景観も評価するよう景観整備の見直しを求めるものであった。上杉和央「過去の世界をめぐる認識・知識・想像力」（竹中克行・梶田真・山村亜希・大城直樹編『人文地理学』ミネルヴァ書房、2009）、212頁。萩野昌弘「『現在』を保存する社会—事物の社会学に向けての序論」（土生田純之編『文化遺産と現代』同成社、2009）、9頁。萩市教育委員会編『萩堀内平安古—萩市〔堀内・平安古地区〕伝統的建造物群保存対策調査報告』萩市教育委員会、1986。なお、岐阜県岩村のまちづくりを扱った拙稿でも、町並みの特徴である明治期の格子が近世の景観に復元した場合失われることに触れた。拙稿「まちづくりにおける文化の構築—岐阜県岩村町の事例から」地域と環境3、2000、1-20頁。
- 2) 山口美由紀『長崎出島—甞るオランダ商館』同成社、2008。
- 3) 新木武志「文化遺産による歴史認識形成の課題と展望—史跡出島のメタヒストリーをとおして」教育実践学論集（上越教育大）2、2001、77-90頁。
- 4) 奈尾信英「方法としての復元—観光都市のまちづくり:平戸商館・長崎出島・北九州門司（復元思想の社会史11）」住宅建築297、1999、96-101頁。
- 5) 上記の他、出島復元整備を総合的に扱った研究として次の2点がある。織田竜也「観光資源としての歴史空間—長崎市出島と蘭商館跡の復元整備事業」慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要63、2006、73-85頁。木

- 村奈緒子「出島復元事業について」(お茶の水女子大学文教育学部人文学科地理学コース編『長崎の地域調査』お茶の水女子大学文教育学部人文学科地理学コース, 2009), 51-63頁。
- 6) 大阪朝日新聞(九州版)1919年8月17日。
  - 7) 「博物館ニュース」の記事に「直径30センチの鉾を2米間隔に打ち込み」とある。「出島蘭館跡保存施設」博物館研究10-4, 1937, 242頁。
  - 8) 東来野夫・鶴江漁史『長崎名所案内』虎与号商店, 1903, 37頁。
  - 9) 鉄道院編『鉄道旅行案内』鉄道院, 1914, 178頁には簡単な記述があるが, 1915~24年の鉄道院, 鉄道旅行案内編纂所, 鉄道省による全国規模の鉄道旅行案内には全く記述がない。
  - 10) 長崎市議会編『長崎市議会史記述編第2巻』長崎市議会, 1996, 414頁。
  - 11) オランダ本国がフランスに併合されていたナポレオン期(1810~13年), 世界中でオランダ国旗が掲げられていた地は出島ともう1ヵ所しかなかったことから, 出島はオランダのナショナリズムにとって重要な場所とされる。オランダ大使から日本への要求, そして文化財保護委員会から長崎市への指示の次第は, 当時長崎市教育委員会社会教育課長であった築瀬によって手記にまとめられているが, それ以上の大使と首相の会談記録などそれ以上の証拠はみつかっていない。①築瀬義一「出島と取り組んで」長崎談叢47, 1968, 120-124頁。②「皮算用(出島復元11)」読売新聞(長崎版)1999年1月30日。
  - 12) 西日本新聞1953年1月26日。
  - 13) 長崎日日新聞1957年11月10日。
  - 14) 長崎日日新聞1952年9月10日, 西日本新聞1955年2月19日など。
  - 15) 石倉は戦前の史蹟関係文献ではオランダ商館の遺構とはみなされていない。長崎県史蹟名勝天然記念物調査委員会編『長崎県の指定史蹟名勝天然記念物』長崎県, 1928, 4-7頁。
  - 16) 「オランダ屋敷復元に横ヤリ 疑点を含む“石倉”長崎地方監察局が警告」朝日新聞(長崎版)1957年5月7日。また菱谷がその経緯の一端を紹介している。菱谷武平「出島の『石蔵』と東山手の『オランダ坂』と一コスモポリタン長崎の錯覚」長崎談叢47, 1968, 1-27頁。
  - 17) 前掲11) ①121頁。
  - 18) 居留地期に埋め立てられて遊歩道となった出島南側の道路の南側にこの鉾は設置されている。日本史研究者の菱谷は鉾について「終戦後に作られたもの」, 「この鉾打は戦前に, 私が長崎転住の当初, 既に今よりも, もっと鮮明に同一場所に標識されていた事を記憶している」と述べている。菱谷武平「パークスの遊歩場構想について—出島趾復元への一示唆」長崎談叢57, 1975, 30頁。鉾の位置を地図化したものとしては次の文献がある。出島整備を促進する会編『出島阿蘭陀屋舗—いまとむかしごあんない』出島整備を促進する会, 発行年不明(内容から1976~80年頃と判断)。
  - 19) 長崎新聞1966年7月7日。同7月8日。
  - 20) 西日本新聞1970年11月5日。毎日新聞(長崎版)1970年11月12日。
  - 21) 当時, 旧内外クラブが出島資料館として利用され, 1階がオランダ, 2階がポルトガルにそれぞれ関わる展示であった。①長崎新聞1977年9月18日。②朝日新聞(長崎版)1978年3月13日。
  - 22) むろんそれは居留地期・明治期の景観を積極的に評価するというよりも, 予算不足や文化財保護において建造物の復元が一般的ではなかったことが大きな要因であろう。
  - 23) ①長崎市史編さん委員会編『新長崎市史第4巻現代編』長崎市, 2013, 102頁。ただし, 初期の「戦災復興都市計画」・「国際文化都市建設計画」では出島の中央を街路が貫き, 出島町は区画整理区域に入っている。②長崎市編『長崎市制六十五年史前編』長崎市, 1956, 1309-1311頁。
  - 24) 前掲12)。
  - 25) 長崎日日新聞1957年1月25日。
  - 26) 例えば新聞紙上では諸谷義武市長の復元に積極的な姿勢が報じられている。前掲21) ②。

- 27) 梶 兼行「『出島』の復元をめざして」公明 209, 1979, 161-163頁。
- 28) ①長崎市出島史跡整備審議会編『史跡出島和蘭商館跡復元整備構想答申書』長崎市出島史跡整備審議会, 1982, 7-8頁。ただし、直前の新聞では「『当時の全面復元は困難』として、カピタンハウス、出島と対岸を結ぶ橋の復元など一部復元にとどまる見込み」と報じられており、議論がゆれていた可能性もある。②長崎新聞1981年10月16日。
- 29) 一般に文化財建造物の復元が一般化するのには1980年代終わりとされるが、1980年代前半のこの時期でも、首里城、五稜郭、小田原城などで復元を盛り込んだ計画が策定されている。
- 30) 前掲28) ①。
- 31) 近年では、国指定史跡の公有化にあたっては保全・活用を図るという目的が必要であり、空き地のまま放置した場合、会計検査院から不適切であると指摘を受ける可能性がある。高橋和夫「史跡の保存と活用を考える」(坂詰秀一監修『観光考古学』ニューサイエンス社, 2012), 136-142頁。
- 32) 秋元秀聡(東京海上長崎支店長)「出島おらんだムード」長崎文化33, 1973, 46頁。
- 33) 前掲23) ①762頁。
- 34) 西武セゾングループを中心とする構想であったが頓挫した。前掲23) ①470頁。
- 35) 長崎市『史跡「出島和蘭商館跡」復元整備計画書』長崎市, 1996。
- 36) 出島復元を「本市の町づくりのシンボリック事業として推進したい」と述べている。伊藤一長「出島・オランダ船復元と都市再生」地方自治職員研修30-9, 1997, 11頁。「出島復元・上 関与(検証伊藤市政12年 長崎は変わったか23)」長崎新聞2007年7月19日。
- 37) 出島の整備に目だった反対はない。その1つの理由として、反対の論陣を張りうるほばすべての専門家が長崎市出島史跡整備審議会に取り込まれていることを指摘しておく。そのうちの一人、林 一馬氏(長崎総合科学大学, 建築史)は出島復元整備によって「それ以前の出島, あるいはそれ以後, 居留地時代の出島は抹殺される恐れ」を指摘し、「単層的ではなく、重層的な復元ができないか」と述べるが(1999年11月6日, シンポジウムでの発言, 「出島を中心とした町づくり—世界遺産を目指して」(西和夫編『長崎出島ルネサンス—復元オランダ商館』戎光祥出版, 2004), 176-183頁), 1994年以降、審議会委員である。また、出島橋や中島川改修の近代化遺産としての位置づけについて発言している岡林隆敏氏(長崎大学, 土木史)も同様に審議会委員である。
- 38) 次の文献に議論の一端が紹介されている。林 一馬「出島の復元整備とその資料」長崎文化57, 1999, 9-10頁。また『復元整備計画書』では「明治期建造物等の取扱い」として「長期復元整備での取扱いについては、短中期整備の中で建物の復元が進んだ時点で改めて検討する」とされている。前掲35) 40頁。
- 39) 出島南側の石垣は県天然記念物(1966年4月18日指定)デジマノキの根が張り出した部分だけ復元・顕在化されていない。デジマノキは居留地期に植えられたものであり、それを保全するのであれば旧内外クラブに対しても同様な配慮がなされるべきだろう。
- 40) 座談会における一住民の発言。「なつかしいよき時代の思い出 座談会」長崎文化33, 1973, 25-33頁。
- 41) 岡林隆敏・島田省三「『出島橋』に関する歴史的考察」長崎大学工学部研究報告22-38, 1992, 87-94頁。撤去・移設の批判として次の文献がある。加藤哲也「撤去される日本最古の鉄製橋『出島橋』(九州遺産)」財界九州 51-3, 2010, 166-168頁。
- 42) 岡林隆敏「長崎市の港湾事業と構造物」(長崎県教育委員会『長崎県の近代化遺産—長崎県近代化遺産総合調査報告書(長崎県文化財調査報告第140集)』長崎県教育委員会, 2008), 55-57頁。
- 43) 1898年開局。なお、この用地は1954年の河川改修ですでにかなり削られてはいる。
- 44) 上述の座談会における郷土史家・越中哲也の発言。前掲40) 27頁。

- 45) 「都市計画の波 場当たりの保存行政（消えた“証人”長崎の被爆遺構3）」長崎新聞2004年7月23日。
- 46) 前掲40)。「(出島復元8)50年近く用地買収続く」読売新聞(長崎版)1999年1月26日。
- 47) 島内八郎(口述)「出島 ピナテールの恋」長崎文化33, 1973, 34-35頁。
- 48) 鹿村出羽『長崎異国風景』長崎文献社, 1932, 41頁。その他, 前掲40), 前掲47)。
- 49) 1970年日本万国博覧会にポルトガル政府によって出品され, その後, 長崎県に寄贈, 1973年に長崎市に譲渡された「フレンドシップメモリー」と題する記念碑で, ザビエルなど6人のポルトガル人を顕彰するもの。直接, 出島と関わるわけではない。
- 50) 長崎新聞2008年12月18日。
- 51) <http://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/kenseijoho/kennokeikaku-project/keii-kihonnkousou/4011.html> (2013年8月31日検索)
- 52) 前掲51)。
- 53) 前掲51)。
- 54) 「跡地は『長崎奉行所』? 整備懇で透ける県の思惑」長崎新聞2008年11月19日。
- 55) 日本史研究者の外山は, 1994年に立ち上げた「出島・長崎奉行所を復元する市民の会」では, (2005年に長崎歴史文化博物館として一部が復元された長崎奉行所立山役所ではなく) 西役所の復元を当初から念頭においていたと述べている。外山幹夫「県庁舎の整備をめぐる」長崎新聞2011年2月8日。外山らの会の紹介は, 「長崎・出島の復元」長崎人17, 1998, 5頁。またこれとは別に経済界から県庁舎跡地に「観光情報発信拠点」を求める提言が出されている。長崎新聞2012年6月20日。
- 56) 前掲51)。
- 57) 安野眞幸『港市論—平戸・長崎・横瀬浦』日本エディタースクール出版部, 1992, 167-168頁。
- 58) 宣教師ヴァリニャーノの記録に出てくる。前掲57) 201-202頁。
- 59) 川口洋平・村尾 進「港市社会論—長崎と広州」(桃木至朗編『海域アジア史研究入門』岩波書店, 2008), 173-174頁。